

E・ケテラー『邪教／殉教の明治 廃仏毀釈と近代仏教』

思想史研究が学問概念や叙述の文脈、要するに言説の構造を問わないことで、むしろテクニカルな営為、すなわちテキストによって当の現実をも創造する営為を担っていることが糺されて久しい。だが、言説に翻弄されているかのごとくに、既成のディスプリンはますます精緻な実証を積み上げていることとは対照的に、当の言説自体を穿つ研究成果はあまりに少ない。その意味では、本書は言説論的視座で日本研究を行ってきたシカゴ学派の手による、近代日本の学問的概念や言説の根底を問う貴重な研究成果である。

本書が明らかにしようとしていることは、明治以降の仏教、したがって今日のわれわれもそれと自明視している仏教という言説が、どのような経緯で自明化していくのかという問題である。具体的には、近世後期の排仏論、明治維新後の廃仏毀釈、教部省期の国民教化への参加と離脱の一つ一つの過程への「応答」を経て、仏教者が「新仏教」としての近代仏教をどのように再定義していくのかを、本書は解き明かそうとする。そして、何よりも興味深いのは、一八九三年シカゴ・コロンビア万博時に開催された万国宗教大会への日本仏教の参加こそが、近代仏教の創造にあたっては決定的な役割を果たしたことを叙述している本書第四章「バベルの再召」である。進化論や比較宗教学などが跋扈するまさにその頂点の時期の日本仏教者（臨済宗・真宗・天台宗など）のシカゴへの登場は、一方ではオリエンタリズム剥き出しにそれをキリスト教的宗教概念に包摂しようとする主催者側の意図を超えて、まさしく日本仏教者自体に近代宗教の立場＝世俗社会内存在としての立場を十分に自覚させるものであったと著者はのべる。さらに、アジア文化の淵源として表象された仏教を日本仏教が代表することを通じて、今やコスモポリタンのに再定義された日本仏教が、その定義自体によってどのような役割を世界・アジアで果たすことになるのが、ここでは暗示されている。

続く第五章「歴史の創出」は、万国宗教大会参加後に痛感された宗派を超えた「通仏教」

今日のわれわれの自明視している仏教の意味するそれの構築、そのための仏教の「歴史」や「教典」の創出過程があぶり出されていく、その意味では言説論的視座に立つ本書の主題的な部分である。そのために明治仏教者たちが注目したものこそ、凝然著『八宗綱要』（一二六八年成立）と中国の馬鳴著とされる『大乘起信論』（五世紀頃成立）であったと著者はのべる。前者こそが通宗派的な教義として各仏教の教育機関で用いられるようになり、かつ後者こそがその後の多くの仏教研究者の東方仏教論の核となったことを考えれば、それは妥当な指摘といえるが、ここで注目すべき指摘は、これらの著書を出発として仏教史という歴史叙述や新たな「聖典」の形成が可能となったということであろう。日本仏教を日本国家の歴史の重要な一翼に組み込む『仏教各宗綱要』や仏教哲学・西洋倫理、さらには教育勅語まで射程に入れた『仏教聖典』の成立こそ、明治仏教が近代仏教として再定義されたまさにその瞬間であったと本書は結ばれる。

明治仏教＝近代仏教の再定義化とその自明化について、本書の言説論的検討はきわめて刺激的なもので多くの示唆に富む。とりわけ、この時期がキリスト教の浸透や、宗教概念・神道概念が同時に構築されていった時期であることを勘案するならば、磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜』（岩波書店、一九九三年）などと並んで、ようやくにして近代日本宗教史研究は新たな段階に入ったという思いは禁じえない。本書の第一章から第三章に関しては、近世思想史からのやや超然的ともいえる系譜的分析が見られ、あるいは廃仏毀

釈から教部省期の分析には新鮮さが欠けるなどの不満も残るが、言説論的分析の有効性を鮮やかに示したという本書の意義を減ずるものではない。なお、本書末尾において、著者と親好のあった羽賀祥二氏と磯前順一氏によって、それぞれ本書の研究史的意義やアメリカの日本研究の現況が丁寧に解説されており、読者の理解を助けていることも付言しておきたい（桂島宣弘 立命館大学文学部教授）。